

# メイプル



湖二合河  
藤田 ひおこ・絵

明るく騒がしかった町が暗く静かになると、わたしとメイプルの時間がはじまる。

わたしは二階にある自分の部屋のドアを閉め、クローゼットの扉を開けた。クローゼットにはいつも鍵をかけていて、鍵は紐で首からぶら下げてある。

カチリ、と鍵穴が音をたてると、内側から扉が開き、のっそりとメイプルが姿をあらわす。メイプルのからだは、夜の色。昼のあいだクローゼットの中に閉じこめられていたメイプルは、低いうめき声をあげながら、からだを伸ばした。ホットケーキに染みこんでゆくシロップのように、部屋じゅうに闇がひろがる。

窓を開けたとたん、風がどっと押し入ってきた。

―すごい風。見て、あの風見鶏。ちぎれてどこかへ飛んでいきそう。

―そりゃあ最高だ。今日は好きなだけ暴れられる。ほら、乗りな。

わたしはパジャマのうえにフード付きの黒いレインコートを羽織り、かたくうねった毛でおおわれたメイプルの背中によじのぼった。レインコートも髪も心臓も、出発を待ちきれずに踊りだしている。

通りの向かいに連なる家々の三角屋根。屋根と屋根がつくる黒い波の間からのぞいているのは、本物の海だ。海は、吹きすさぶ沖からの風に泡立ち、荒れくるっている。